

ZENBUTSU



全仏

No.
536

仏暦2551年1月
[2008年]



(タージマハール 撮影 白川 淳敬氏)

目次

——— 新年のご挨拶 大道晃仙会長・安原晃理事長
第40回全日本仏教徒会議神奈川大会開催
論点・視点 ⑬ 長倉伯博「仏教と医療」
加盟団体をゆく 第12回 臨済宗建長寺派
NEXT50 ⑤ 松濤弘道「時代を先取りする日本仏教へ」
天台眞盛宗 西村岡紹管長 晋山式
第53回 長野県仏教徒浅間大会開催
会長・副会長推戴委員会/常務理事会 開催

新年にあたって



会長

大道 晁仙

平成二十年の年頭を迎え、謹んでお慶び申し上げ、皆さまのご多祥を心よりお祈り申し上げます。

全日本仏教会加盟団体各位には、日頃より仏教興隆のため、さらに昨年から今年にかけて開催されております財団創立五十周年記念事業には格別なるご尽力、ご協力を頂いておりますこと、誠にご同慶の至りに存じ上げます。

さて、我が国はじめ世界各国において、現代は混迷の時代と言えます。

人々は、何を支えとして生きるべきか、その拠りどころを見失っていると言っても過言ではないでしょう。

いまこそ、仏教徒は 共に力をあわせて何を成すべきか。果たすべき役割とはなんなるかを私たちは、真摯に今一度、共に問い直し 具体的な活動に

歩み出さなくてはなりません。

世界人類が求めているのは、人々が互いに認め、尊びあう共生であります。それこそが、釈尊の「慈悲と中道」の教えであり、私たち一人ひとりが、大切にしなければならぬ仏教徒の真髄であります。

全世界で起きているさまざまな問題を、自らの問題として捉え、人心の安寧と世界平和を冀い、自然を愛し共に生きる活動こそ、佛の道であると考えます。

新たな年を迎えるにあたり、四海波静かなる訪れをお祈りいたしますとともに、皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げ、新年の賀詞といたします。

合 掌

年頭の御挨拶



理事長

安原 晁

新春を迎え、各位には益々ご清栄のことと存じ、心からお慶びを申し上げます。

昨年来の全日本仏教会財団創立五十周年記念事業の開催につきましては、各位より格別のご協力を賜っておりまことに對し、心から厚く御礼を申し上げます。昨年八月の記念式典では、仏教徒の自覚に立って宗派相互の絆を強化し、地域への貢献、アジアの仏教徒との友好、並びに世界の仏教徒や宗教者との提携促進を確かめ、本会創立の趣旨を再確認しました。また、十一月の第四十回全日本仏教徒会議神奈川大会では、神奈川県仏教会と共催して、仏教徒の今日的な課題を共有・討議し、仏教徒としての意識昂揚に努めることができました。なお、この大会で提起されました諸課題は、本年十一月、三十年ぶりに日本で開催されます第二十四回世界仏教徒会議日本大会へ引き継ぎ、全仏教徒による豊かな社

会の実現と世界平和の実現に向けて寄与したいと、心から念じております。

私どもをとりまく現代社会は、益々混沌とした様相を深めております。核の脅威や環境汚染の問題、自死やいじめをはじめとする生命軽視の問題など、枚挙にいとまがありません。それらは一口に言って、人間のもつ理性的叡智の限界、人知の行き詰まりが、愈々あらわになったと言つてよいでしょう。本来、仏法は人知を超えたものであり、人知の闇を照らし出すものです。その意味で、現代の混迷を打破できるのは仏法しかないことを、私ども仏教徒はあらためて深く自覚し、自信をもって行動を起こすべきであります。

各位のなご一層のご指導ご協力をお願い申し上げます。年頭の挨拶とさせていただきます。

合 掌

全日本仏教会 財団創立50周年記念事業 第40回 全日本仏教徒会議 神奈川大会

「地域の縁、アジアの縁——共生をめざして——」



開会式
三帰依文唱和

ふれあい、わかちあい、たすけあいの社会を実現しよう
横浜の地に仏教徒六〇〇〇人が結集

二〇〇七（平成十九）年十一月十九日（月）・二十日（火）、神奈川県横浜市、パシフィコ横浜において全日本仏教会財団創立五十周年記念事業「第四十回全日本仏教徒会議神奈川大会」が開催された。
大会のテーマは、「地域の縁、アジアの縁——共生をめざして——」。
大会テーマの下に、十九日は開会式、基調講演（奈良康明氏）分科会、加盟団体代表者会議、交流懇親会が行われ、翌二十日には、開会式、法要、雅楽演奏、大会宣言、特別記念講演（ダライ・ラマ法王）、閉会式が行われた。二日間て延べ六〇〇〇人の仏教徒が結集した。

【関連記事は十八〜二十一頁に掲載】

開会式では、倉田隆常大会副会長の開会の辞ののち、安原晃理事長を導師として三帰依文を唱和。
続いて安原理事長は、地球温暖化、自死問題等を憂慮し「今大会で提起された課題を、三十年ぶり日本で開催される世界仏教徒会議日本大会に引き継ぎ、豊かな社会の実現と仏教興隆に寄与されるようお願い申しあげる」と挨拶した。

横山敏明大会会長は、「物質的に豊かになった歪みを是正すべ



安原晃理事長

く、共生を目指して行動を起こさねばならない時が来た」と、仏教徒の決起を促した。

来賓各位より祝辞が述べられ、閉会。休憩の後、奈良康明駒澤大学前総長の基調講演「草の根的対話の提唱」が行われた。（十八頁に続く）



横山敏明大会会長

論点・視点 ⑬ 仏教と医療

仏教と医療が臨床で出会うー緩和ケアの現場からー

浄土真宗本願寺派ビハーラ推進委員 長倉 伯博

―出発―

二十年程前のことだが、親しくしている友人の医師から次のようなことを問われたことがある。

「君たち僧侶は、よく生死の問題について説法しているが、身内以外の死にゆく人の看取りの現場にいたことがあるのか。亡くなってから出かけることも、遺族にとって大切なことだとは思いますが、その前の病気の重い段階でも、患者さんやその家族の悩みは深いものがある。その苦悩に寄り添うことも君たちの仕事じゃないのか。」

言外に葬式仏教を揶揄するような皮肉めいた口調だったから、その時は少し悔しい思いをしたが、今思い返すと励ましと期待だったらしい。なぜなら、彼は、当時としてはまだ少数であったターミナルケアに關心を持つ医師の一人であったと後で知ることになった。

ちょうどその頃、私の所属する浄土真宗本願寺派が医療と福祉と仏教が連携することを目標とした「ビハーラ実践活動研究会」の研修生の募集を始めた。先ほどの友人の言葉も頭の片隅にあり、寺院や僧侶の社会参加の在り方を模索していたこともあって受講することにした。この講義の中で、麻酔科の医師や我が国で最初にホスピス病棟を設立した聖隷三方原病院の医師やチャプレン（病院付牧師）の活動を知り、医療と宗教の連携の可能性を見出したのである。この後、ビハーラ鹿児島、鹿児島ターミナルケア（後に緩和ケアに改称）ネットワークの設立に参加し、現在、寺務の傍ら鹿児島医療センター緩和ケア委員、国立南九州病院倫理委員となり、それぞれ週一回程度の緩和ケアチームのメンバーとして病院に向かっている。その他に、不定期に要請に応じて出かける病院もある。

―全人的痛みと緩和ケア―
さて、緩和ケアについて少し触れておきたい。

WHOの定義によれば、「治癒を目的とした治療に反応しなくなった患者に対する積極的で全人的なケア」であり、「身体的、心理的、社会的、スピリチュアルな痛み」からの解放を目指し、患者だけではなくその家族の痛みも視野に入れて、可能な限りのQOL（キユオリティ オブ ライフ）の達成を目標とするものである。

このことを実現するには、一人の力では到底無理で、多職種によるチームケアによって初めて可能になる。そのチームの一員として僧侶も要請されることになる。

現在のところ、私の対象となる患者は、例外を除いてほとんどががんの終末期の患者である。本来、緩和ケアはがんと診断された時から始めるとされているが、現実はそのようではない。患者、家族の希望もあって、ともすれば行き過ぎではないかと思えるぐらいにぎりぎりまで治療が施される。そして、疲れ果てて緩和ケアにたどり着くという場合も多い。この状態で、自分の置かれた危機的状況に向き合うのは不可能である。緩和ケア病棟における平均在院日数

は三十日程度であることから想像できるだろう。従って、チームは、患者と家族がもう一度自分に向き合う体力を回復することに努力を傾注することになる。その上で僧侶の領域であるスピリチュアルな痛みに対応することになるのだが、日数が限られているので、同時進行で他の職種と協力して対応するのが実際である。また、全人的痛みとして挙げた四つの課題は独立して起こっているのではなくて、相互に関連して増強すると考えたほうがよいから、チームアプローチが要求される所以である。しかし、そのうちどれかが解決すると他の痛みも軽減することもあ

―スピリチュアルな痛み―

この痛みについて片仮名で表記せざるを得ないのは、まだ適切な日本語がないからである。宗教的、霊的、実存的、根源的などと訳されているが、どれもきっちり説明できているとは思えない。これは、健康なときでも考える内容ではあるが、終末期になると激しく出現する事も多い。ここでは、私の経験した例をいくつか紹介する。

①地獄に往くのです

（五十代男性）

- ②殺して下さい (五十代男性)
- ③火葬場に行きたくない (十代男性、九十代女性)
- ④幻覚にふるえる自分が情けない (六十代男性)
- ⑤子供を残して死にたくない (三十代女性)
- ⑥死ぬまでどうして過ごせばいいの
でしょう (六十代女性)
- ⑦まだ生きられるみんながうらやましい (四十代女性)
- ⑧うちのおかあさん死んだら終わりのな (小学二年)
- ⑨死にゆく母にどう接したらいいの
か (三十代男性)

は信頼関係が構築されてからのことである。基本的には自分の生死は自ら向き合うしかない。私たちにできることは、とりあえず寄り添うことしかない。換言すると、孤独にはしないということである。具体的にそれぞれの患者や家族がどう経過したかは別の機会に譲るが、自分ならどうするか考えていただきたい。よくある訴えであり、医療から仏教が期待される課題である。

—滋賀医科大学での試み—

しかし、いくら必要性を強調しても日本の病院には僧侶の姿がない。現代日本人の宗教性の希薄さにも起因するだろうし、医療と仏教双方にさらなる理解と協力も求められるだろう。

その解決といつてはあまりにささやかであるが、滋賀医大の理解を得て、医学生と看護学生、若手僧侶を一同に会した講義を試みている。

早島理教授主催の「医の倫理」の講座の中で、三コマ、「ターミナルケア」という題で、医学科は四年次の必修科目、看護学科は四年次の選択科目として配当し、そこに、約二十名の若手僧侶を加えて、特に講義の後半はグループ分けして、模擬症例についてディスカッションを行っ

ている。大病院の医療ソーシャルワーカーや患者さんにコメントターターをお願ひすることもある。

すでにおわかりと思うが、病棟での多職種間のカンファレンスの訓練、立場による患者家族像の見え方の違い、自分自身の死生観の再検討などを目的とし、医療と宗教の垣根を越える人材に育って欲しいと願っている。提出されるレポートを読むと、医学生、看護学生からは、僧侶と話したのは初めてだ、自分たちとは違う死生観を持っているので参考になったなどの意見が述べられている。また、僧侶の側からは、医療者の卵たちが真剣に議論する様子に驚き、医療に対するいままでの偏見が拭い去られたとの声も聞かれた。

この講義は今年で四年目になる。医療と宗教が理念ではなく、臨床例を通して出会うという当初の目標は達せられていると思うが、さらに充実させる方途を探っている。

—これからの課題—

以上、簡単に医療と仏教の出会いについて考えてきたが、両者の溝はまだまだ深い。しかし、この分野で活躍する各宗派の僧侶のお名前も聞かれるし、各宗派での研修も進められていることしばしば耳にする。

個人的なことだが、天台宗と日蓮宗の地方の研修会にお招きいただいたことがある。真宗僧侶を講師にすることはきつと抵抗もあったのではないかと想像したが、檀家さんの苦悩に答えていこうとする姿に感銘を受けた。お互いに寺と檀家、宗派の垣根を越えて行くと、また医療と仏教という垣根を越える展望も開けると思う。

浄土真宗本願寺派では今春、緩和ケアを意識した有床診療所と介護老人施設を開設する。そこでの新たな経験をお伝えする機会を楽しみにしている。

長倉伯博(ながくらのりひろ)

浄土真宗本願寺派善福寺住職

早稲田大学文学部卒業

龍谷大学修士課程修了

滋賀医科大学・鹿児島大学・龍谷

大学の非常勤講師を勤める。

浄土真宗本願寺派ビハラ推進委員

国立鹿児島医療センター緩和ケア

委員

* 次回の「論点・視点」(三月号)は、花園大学非常勤講師 根本治子氏にご寄稿いただきます。

加盟団体をゆく

《第十二回》臨済宗建長寺派

「加盟団体をゆく」第十二回目は臨済宗建長寺派を訪ね、高井正俊総長及び山本莞山総務部長にお話を伺いました。建長寺はJR横須賀線北鎌倉駅より十五分という立地で、取材当日も沢山の方が参拝、散策に訪れていました。



高井正俊臨済宗建長寺派宗務総長

「宗派の活動で、継続的に、また特に力を入れていらっしゃる点についてお話し下さい。」

建長寺派では、宗派・本山共通の方針として、「信頼される寺づくり」の継続を掲げております。また、「かけがいのない命」を大切にしてその尊さを伝道している、という副題も掲げています。これは寺院への信頼が揺らいできてしまっている現状を危惧しているからに他なりません。葬儀法要ですらいわゆる直葬と呼ばれる葬儀はせずに直接火葬をして法要を省略していく社会の動きは確実に広がってきています。この状況を改善するためには、葬儀・法要を大切に行い、自分達のしている基本の仕事に対してエネルギーを注ぎ、多めに勉強をしていくことが大切だと思えます。そのため、わかりやすい仏事を目指して、住職研修会での持続的な活動を積極的に行っております。

また、「信頼される寺づくり」の為には、日常生活の中に仏教を活かしていくことが大切です。建長寺派として、「合掌一礼」運動の推進を行っています。これは、本山の仏殿・法堂に管長様の直筆で「合掌一礼」を表示し、派内の寺院には木札を掲示し、本山でも派内寺院でも「合掌一礼」が出来るよう運動を推進しています。本尊さんに対してだけでなく、ご先祖様、人間同士にも合掌一礼し、合掌の心（ありがたうの心）を日常生活にかかしている、という運動です。また建長寺本山としましては、開かれた寺創りの実践を行っております。建長寺は、鎌倉という土地から、非常に多くの参拝のお客様が訪れて頂きます。そこでもう一步進んで、お寺の中にまで入って頂けたらもっと良さを知っていただけるのではないかと考えています。会場を音楽・芸・能・狂言などの伝統文化の催しを中心に積極的に貸し出してあります。鎌倉カ

ルタ・鎌倉寺子屋、土曜朗読会といった地域団体との共催事業にも力を入れております。

そうした活動を通じて、鎌倉市民にも寺院の価値を認めて頂けており、特に鎌倉寺子屋は、地域で子供をどう育てていくか、という問題に対して、青年会議所・早稲田大学のゼミ・神社仏閣といった複数団体が共同で青少年の育成にあたっており、寺本来の機能を活かした協働参画事業にまで発展している、と言えるでしょう。今後、もこうした活動をより発展させてゆきたいと考えております。

「昨今の様々な社会問題について、感じていらっしゃる思いをお聞かせ下さい。」

様々な問題が噴出する社会情勢ですが、日常生活習慣の崩壊と、人と人とのつながりの心の欠如が全ての問題の根本原因ではないでしょうか。

禅宗系の宗派の特徴として、坐禅・食事の作法・掃除などの際、

非常に規律正しい事が挙げられます。伝統的に長く続いてきた事というのは、それだけの理由と力がそこに込められています。その力に目覚め、再発見をして活用していくことが重要だと思います。寺のもっている日常生活や習慣、伝統で何を発見すれば素晴らしい力になるのか。それに目覚めていく事が、われわれ僧侶の使命であると思います。

―現在の仏教界と今後の仏教界の在り方について、指針のようなものをお聞かせ下さい。

お寺が見えてこない、という部分が現在非常に問題になっていることと思います。

お寺は全国に七万以上、たくさんのお寺があります。その全部で朝のお勤めをするだけで存在をアピールできます。又、個々に対してはあのお寺に行くこと楽しい、あのお寺に行くとか荘厳な雰囲気、体験できる、いろんなお寺があつていい、と思います。

では、個々の寺が特色を出す為の努力をしているでしょうか？存在感が無く、アピールするものもなく、努力もしていない。結局葬儀法要でしかお寺が見えない。しかも、その状況を寺院側が特に問題視していない、というのが現状ではないでしょうか。

葬儀法要だけで布教するのではなく、何を訴えたいか、何を求められているか考える。個々の寺院単位でそれが不可能ならば地域ごとの交流を深め、相互にそれを補っていく。そうした活動が重要で

す。

戦後六十年余りが経過し、世代交代が日本でも進んでおります。つい後回しになってしまいがちな問題を、見直していく非常に良い時期ではないかと考えております。

諸先輩方が築き、保ってきたくれた教え。その上になんとなくのほほんとしていて良いのでしょうか。

―財団創立五十周年を迎えた本会

の活動へのご意見・ご要望がございましたらお聞かせ下さい。

全一仏教運動の姿、というのが良く見えてこないのが残念なところで、せっかく素晴らしい発想があるのですから、その具現化を行って行くべきだと考えます。また、要求もあがってこないのが現状ではないでしょうか。参画意識の向上が急務でしょう。

あくまで方法論の問題ですが、京セラの創業者の稲盛和夫氏、作家の五木寛之氏、立松和平氏といった、伝統仏教に好意的な方の協力を仰いでいく、伝統行事に合わせたハツとするようなイベントを行なう等して内外に向けて全日本仏教会という団体をアピールしてゆく必要があるのではないのでしょうか。

また、宗派を超えて連携できる仏教行事を繰り返し行なっていく事が非常に大切だと思います。具体的には「花まつり」が一番でしょうか。全日本仏教会で頒布している「花まつり」ポスターは非常

に評判が良かったので、今後是非継続して頂きたいです。また、ポスターのみならず、様々な花まつり運動の連携も強化してゆけるとより良い形になるでしょう。

インターネット等のメディアに関しては、臨済宗と黄檗宗が共同で設立した禅文化研究所で力を入れていますが、ネットに集約した情報をどう活用していくか、ネットと社会や檀信徒をどう繋ぐ事が出来るのかは未だ研究中です。

そういったネット上の連携においても、研究成果等を含めて宗派と全日本仏教会間でニュースの相互交換等の連携が取れるような体制が今後必要になってゆくのではないのでしょうか。

(談)

建長寺ホームページ

<http://www.kenchoji.com/>

臨済宗・黄檗宗公式サイト

臨黄ネット ホームページ

<http://www.rinhounet/>

禅文化研究所 ホームページ

<http://www.zenbunka.or.jp/>

NEXT50

⑤

時代を先取りする日本仏教界へ

WFB世界仏教徒連盟副会長・本会理事 松濤 弘道

最近の世界は核兵器やテロへの脅威が増幅し、わが国でも各階層での不祥事が続発し、国民自体もモラルが失墜して止まるところを知らず、行き先不安の混乱の度をますます深めています。仏教会がこの現状を黙視し、率先して打開する指導性と公益性を発揮できなければ、国民からその存在価値が疑われ、早晚、見放されることになりましょう。

全日本仏教会（以下、全仏）の前理事長・里見達人師（現大正大学理事長）も『全仏』誌上で、「伝統仏教界が往昔の権威を継承することは当然ですが、一方ではその宗教性と高みにこだわらず、現代社会の構造的な近代化と現代人の急速な意識の変化にほとんどついていってないと思います。極言すれば、いまの世の中でもっとも遅れてしまった領域の一つに伝

統仏教があるとおもえるのです」と述べているくらいです。

こうした渦中であって、「地域の縁、アジアの縁」をモットーに、全仏が財団創立五十周年記念事業の締めくくりとして、世界各国からの仏教徒の参集の下、今秋「世界仏教徒会議」を開催することとは、まことに時宜に適したことと言えましょう。しかしながらこの記念事業を真に意義あらしめるためには、一過的なイベントに終わらせることなく、閉鎖的で孤立しがちな社会にあつて、今後、私たちが心の窓を明け、加盟団体および有志が一九となつて仏教界の活性化に邁進することが是非とも必要です。そこで僭越ながら、加盟団体独自では成しがたい、全一仏教拡大発展への具体策の一片を提案したいと思えます。

(一) 国内的活動の活性化に向けて。

一、外部有識者を招いての「シンクタンク」（仮称）を設ける。

仏教界に関係する外部有識者を招いて、効果的に解決すべき諸活動や社会的問題に対する忌憚のない意見や助言を頂く第三者機関を設けたら如何でしょう。

二、仏教界に必要な情報交換や資料収集の場を設ける。

情報公開時代にあつて、仏教界全体が対処すべき問題が山積しているように見受けられます。そこで、かくタテ割りの加盟団体が協力して、必要とする情報や資料を共有し、プライバシーを侵害しない範囲で提供、交換する場を全仏が斡旋し、加盟団体有志による「情報サービス・ネットワーク」（仮称）作りや、資料閲覧の場を隣接の増上寺、浄土宗総合研究所や三康図書館などの協力をえて設けたら如何でしょう。

三、機関誌『全仏』及び「ホームページ」を充実し、広くPRする。

参加の加盟団体・有志に必要な

情報や事業の成功例などを掲載、発信し、加盟団体機関誌のみならず、寺院や地域社会への広報誌への転載を推進する。そうすることによって、仏教界の活動や存在を国民末端にPRすることが出来ましょう。

四、仏教界全体の集會に用いる

「勤行式」を立案・具体化する。

従来、宗派独自の「勤行式」はありますが、超宗派や各種団体合同の集會用のものが見当たりません。今後、一般仏教徒も唱和できる「勤行式」を各界の専門家を糾合して立案、具体化したら如何でしょう。

五、天災地変への緊急支援活動に資する「救援基金」をより活用できる体制作りをする

とにかく仏教界は新興教団やNPOなどと比較して、国内外への救済、支援活動が消極的です。公益性を発揮するためにも、常時、基金をプールして、緊急時に即刻対応する体制作りが必要でしょう。本会にも「救援基金」が設置されています。これを周知徹底し、加盟団体に

も積極的に協力していただき、仏教界挙げての対応をしていく必要があるでしょう。

(二) 国際的活動の活性化に向けて。

一、国際的な仏教、文化活動に積極的に参画する。

最近、国際交流が活発化し、新興教団が積極的に参画しているにもかかわらず、仏教界はとかく及び腰で存在が軽視され勝ちです。例えば宗会議や交流事業に招請を受けても予算や人材が不足し、断念せざるをえないのが実情です。

二、「日本仏教」を紹介する出版物や「ホームページ」を充実させる。

とかくわが国の海外への宗教・文化情報の発信が僅少で、誤解や無知を生む原因となつています。戦前では高楠順次郎博士が英文誌『ヤング・イースト』を創刊し、戦後まもなく休刊しています。それに反して新興教団は積極的に発信し、既成仏教界は「庇を貸して母屋を取られて

いる」のが現状です。

三、世界各国の仏教界の情報を調査、把握する。

海外では東南アジアからの仏教者の命がけの伝道の甲斐があつて、欧米諸国では仏教団体が急増し、カナダだけでも過去十数年の間に三百以上を数えています。その点、わが国の海外開教の歴史が古いにもかかわらず、今いちの感があります。そうした各国の仏教事情を熟知し、各仏教団体有志間の交流、ネットワーク作り役立てる、仏教団体名や住所を一覧できる『世界仏教ディレクトリー』（仮称）の編集出版が望まれます。

四、日英両語による『日本仏教の常識』及び『世界仏教文化百科事典』の普及を。

最近、情報産業が発達し、海外への渡航者が急増しているにもかかわらず、高齢者の後退や「政教分離政策」により、国民の自国文化や宗教（仏教）に対する無知や偏見が顕著で、自信や誇りのなさに影響しているようです。これを是正するためには、

各加盟団体独自の出版物の普及を尊重すると同時に、仏教全体を通底するものが不可欠で、全仏が仏教学者や出版社の協力をえて、全一仏教の啓発とその出版活動の推進役を果たすべきでしょう。

五、国内外で活躍できる有能な仏教青年の育成をはかる。

海外では、信念、語学力を兼ね備えて仏教弘布に専念する仏教者が多数いるのに対して、わが国ではそうした人材が払底しています。今回、宗門大学を中心に、世界仏教徒会議用に立ち上げた仏教青年有志の「仏教英語プログラム」を継続し、人材養成のネットワークを拡大発展させたら如何でしょう。

今日、全仏の果たすべき事業が山積し、期待と責任を問われていながらもかわらず、事務局の現体制ではとても対応しきれそうにありません。有志のボランティア活動にも限界があり、具体案を企画してもそれに見合った人材や予算がなければ断念せざるをえませ

ん。また、いくらやる気がある人間が集まっても、トップが率先して動かなければ到底、実現不可能です。加盟団体の理解、協力と役割分担、全仏事務局の拡充、予算の増額などが是非とも必要です。かつては高階瓏仙、常光浩然、中山理々、友松円諦などの錚々たる諸師が、「金のことは心配するな。俺に任せて思い切りやれ」と後輩を叱咤激励し、加盟団体独自ではなしえない事業を推進して来ましたが、関係各位がいくら掛け声を高くして事業の必要性を叫んでも、言葉だけで実績をあげなければ絵に画いた餅にすぎなく、国民からその公益性や存在価値が疑われるばかりでしょう。そうならな

いたためには、私たちがあなたまかせでなく、今日、仏教界が直面する危機感を共有し、全一仏教の諸事業に対して「自分でできること」（知力、労力、金品、参加など）を自問自答し、実行に移すべきでしょう。上杉鷹山の言葉のよ

うに「成せばなる、成さねばならぬ何事も、成さぬは人の成さぬなりけり」を銘記したいものです。

年 新 賀 謹

会長

大道 晃仙

副会長

佐藤 令宜

寺町 研山

理事長

安原 晃

常務理事

瀨 英徳

不二川公勝

石川 正生

小林 正道

小松 淨慎

服部 融宣

細川 景一

濱中 光礼

島 秀隆

浅井 侃雄

理事

岡野 正純

森田 俊朗

守山 雄順

仲田 順和

藤井 純恵

酒井 文雄

山田 一眞

横山 敏明

加納 博司

近藤 真道

増田 貞圓

坂本 観泰

松濤 弘道

前田 專學

監事

桶屋 良祐

柴田 尚明

樹谷 淳宣

評議員

乙川 映元

桑羽 隆慈

関崎 幸孝

入西 勝彦

伊東 隆司

岡部 兼海

松山 英照

谷 晃昭

上杉 照延

菅野 秀浩

立部 祐道

日下 悌宏

中島 義晃

松浦 浩道

武田 圓籠

高井 正俊

大谷 義博

鬼頭 誠英

坂口 博翁

中江 慈光

岡本 誠教

檜原 禅澄

今杉 康道

竹内 正道

田中 利典

筒井 寛昭

石堂 恵眼

中村 昌道

寺内 泰俊

塚田 宗雄

若槻 繁隆

春日 浩三

山口 祐哉

田中 始更

長澤 香静

川島 謙宗

矢坂 誠徳

橋本 明禅

三浦 章爾

一月 正人

島田 喜久

逸見 道郎

高山 久照

沼田 智秀

安孫子虔悦

東條 仁哲

青木 謙整

安田 義樹

座間 光覚

田邊 圓祥

佐分 宗順

佐伯 龍幸

湯浅 高明

村上 太胤

岡田 康秀

大井 亮

青柳 雅明

三谷 恵仙

萩岡 裕明

高谷 文嶺

海老塚和秀

吉田 海心

善國 乘憲

中山 静磨

総務財政審議会

山下 昭文

中尾 史峰

富樫 珠徳

川中 光教

張田 珠潮

森 寛勝

松山 英照

谷 晃昭

司東 和光

鈴木 道雄

新倉 典生

近藤 真道

高島 孝範

社会人権審議会

坂田 徹心

和治 教文

栗生 孝

浅野 義光

田澤 元泰

深 真樹

神代 紹文

源田 俊昭

佐藤 玲秀

小島 恵真

健代 和央

吉田 泰樹

安孫子虔悦

本多 静芳

吉田 道興

望月 哲也

長谷川正浩

藤丸 智雄

小林 正道

国際交流審議会

桐林 三巳

小林 千秋

秃 信敬

戸松 義晴

持田 貫信

岡部 兼海

渡邊 宗徹

一島 正真

久志 卓世

島村 智教

田中 光成

高島 孝範

坂本 観泰

奈良 康明

松濤 弘道

小笠原隆元

松永 然道

成田 孝英

大谷 哲夫

北川 前肇

塩入 法道

ケ不入 夕十力

渡辺 章悟

広報委員会

松尾 徹裕

中村 澄枝

齋藤 明聖

入西 勝彦

太田 順祥

倉岡 弘叔

並木 優記

福井 邦彦

杉本 栄次

上田 則夫

山本 昭弘

杉山 令憲

高山 久照

坂本 観泰

『全仏』誌論説委

前田 專學

松濤 弘道

野生司祐宏

菅原 伸郎

川橋 範子

福岡 朋裕

年 新 賀 謹

曹洞宗宗務庁

管 長 大道 晃 仙
 宗務総長 淵 英 徳
 参 議 南 澤 道 人
 参 議 藏 山 光 堂
 教学部長 乙 川 暎 元
 総務部長 葦 原 正 憲
 伝道部長 河 村 松 雄
 出版部長 齋 藤 裕 道
 財政部長 山 路 純 正
 人事部長 須 川 法 昭
 教化部長 宮 下 陽 祐

東京都港区芝二一五一二
 〒105-8544 ○三(三四五四)五四一
<http://www.sotozen-net.or.jp>

浄土真宗本願寺派

総 長 不二川 公 勝
 総 務 出口 湛 龍
 総 務 桑 羽 隆 慈
 総 務 宮 崎 憲 之
 総 務 藤 下 恒 庸
 総 務 園 城 義 孝
 本廟局長 藤 岡 崇 信
 宗門長期振興計画
 推進対策室長 仲 尾 孝 誠
 畿東七ヶ岡四院
 中央法要事務所長 那 須 野 淨 英
 教学伝道研究
 センター所長 上 山 大 峻
 本願寺宗務部
 センター所長 山 内 教 嶺
 総局公室長 藤 田 誓 之
 会 行 事 今 小 路 覚 真

京都市下京区堀川通花屋町下ル
 〒600-8501 ○七五(三七)五一八一
 F A X ○七五(三五)一一一一

真宗大谷派

宗務総長 熊 谷 宗 惠
 参 務 石 川 正 生
 参 務 杉 浦 義 孝
 参 務 里 雄 康 意
 参 務 和 田 正 之
 参 務 松 本 好 行

京都市下京区烏丸通七条上ル
 〒600-8505 ○七五(三七)九一八一(代表)
 常葉町七五四

浄土宗

浄土門主 坪 井 俊 映
 宗務総長 稲 岡 康 純
 総務局長 小 栗 賢 亮
 教学局長 石 川 三 雄
 財務局長 川 中 光 教
 社会国際局長
 社会福祉推
 進事務局長 田 中 信 道
 文化局長 岡 本 宣 丈
 総長公室長 光 成 範 道
 人権同和室長 浅 野 義 光
 宿務大六草
 大遠忌事務局長 吉 水 光 慈
 職 員 一 同

浄土宗宗務庁
 京都市東山区林下町四〇〇一八
 〒605-0062 ○七五(五二)二二〇〇(代)
 F A X ○七五(五三)五一〇〇五
 東京都港区芝公園四一七一四
 〒105-0011 ○三(三四三三)三三五一(代)
 F A X ○三(三四三四)〇七四四
<http://www.jodo.or.jp>

日蓮宗宗務院

管 長 酒 井 日 慈
 宗務総長 小 松 淨 慎
 伝道局長 伊 東 隆 司
 総務局長 張 田 珠 潮
 伝道部長 梶 山 寛 潮
 教務部長 渡 辺 照 敏
 総務部長 藤 岡 暎 邦
 財務部長 駒 野 教 源
 宗務総長 長 亮 行
 現代宗教
 研究所長 田 澤 元 泰
 参 与 堀 江 宏 正
 参 与 浅 井 玄 裕

東京都大田区池上一一三二一五
 〒146-8544 ○三(三七五)七一八一
 F A X ○三(三七五)七八八六
<http://www.nichiren.or.jp/>

年 新 賀 謹

総本山金剛峯寺 高野山真言宗

座長	松長有慶	管長	永島龍弘	執行総長	庄野光昭	執行総長	永島龍弘	総務部長	村上保壽	執行部長	飛鷹全隆	執行部長	森寛勝	執行部長	岡部兼海	執行部長	山階清隆	執行部長	山階清隆	総務部長	岡部兼海	局長	深真樹	社会人局長	深真樹	教学部次長	倉岡弘叔	内事長	柏田良辯	奥の院維那	加古原大岳	伽藍維那	坎宥行	東京別院主監 東京務出張所長	服部融宣	堀川別院主監 京都務出張所長	佐々木弘博	和歌山県伊都郡高野町高野山一三二 〒648-0294 〇七三六(五六)二〇一一 FAX 〇七三六(五六)四六四〇 http://www.koyasan.or.jp/
----	------	----	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	-----	------	------	------	------	------	------	------	------	----	-----	-------	-----	-------	------	-----	------	-------	-------	------	-----	-------------------	------	-------------------	-------	---

臨濟宗妙心寺派宗務本所

管長	東海大光	宗務総長	細川景一	総務部長	松井宗益	教学部長	栗原正雄	財務部長	松山英照	本部園長	一色宏襄	本部園長	一色宏襄	法務部長	川島謙宗	花園園長	松井宗益	館部園長	松井宗益	京都市右京区花園妙心寺町六四 〒616-8035 〇七五(四六三)三二二一 http://myoshin.com/
----	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	---

天台宗務庁

天台座主	半田孝淳	宗務総長	濱中光礼	総務部長	谷晃昭	参入部長	壬生照道	参務部長	山本亮裕	参務部長	水尾寂芳	参務部長	源田俊昭	参務部長	秋吉文隆	参務部長	秋吉文隆	大津市坂本四丁目六番二号 〒520-0113 〇七七(五七七)〇〇二二 FAX 〇七七(五七七)二五二六 http://www.tendator.jp/
------	------	------	------	------	-----	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	---

真言宗智山派宗務庁 総本山智積院法務所

管長	阿部龍文	宗務総長	島秀隆	総務部長	佐藤玲秀	教学部長	堀井隆栄	教化部長	久志卓世	法務部長	倉松隆観	財務部長	司東和光	宗務出張所長 別院執事	廣橋義敬	京都市東山区東大路七条下ル 東瓦町九六四 〒605-0951 〇七五(五四)二五三六一 http://www.chisan.or.jp/
----	------	------	-----	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	----------------	------	--

真言宗豊山派宗務所

管長	鳥居慎譽	宗務総長	浅井侃雄	総務部長	中川祐聖	財務部長	鈴木道雄	教務部長	菅野秀浩	教化部長	根岸榮宏	教化センター長	田代弘興	真言宗豊山派総合研究院 院長	加藤精一	東京都文京区大塚五十四〇一八 〒112-0012 〇三三(九九五)〇六三九 FAX 〇三三(九九五)〇七〇二
----	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	---------	------	----------------	------	--

年 新 賀 謹

総本山仁和寺
真言宗御室派
御室流華道総司庁

管門 長跡 佐藤 令宜

宗務行 長 立部 祐道

総執 務部 長 沖田 定信

教 学 部 長 上田 秀宏

財 務 部 長 西 仁海

京都市右京区御室大内三三三
〒616-8092 〇七五(四六一)一一五五
F A X 〇七五(四六四)四〇七〇
http://www.ninnajior.jp
E-mail office@ninnajior.jp

真言宗醍醐派宗務本庁
総本山醍醐寺寺務所

座管 主長 麻生 文雄

宗 務 行 長 仲田 順和

総 務 部 長 岡田 祐雄

教 学 部 長 田村 照晃

財 務 部 長 壁瀬 宥雅

京都市伏見区醍醐東大路町三二
〒601-1325 〇七五(五七一)〇〇〇二
F A X 〇七五(五七一)〇一〇一
http://www.daijioji.jp
携帯電話でも御覧頂けます。



融 通 念 佛 宗
総本山大念佛寺

法管 主長 倍巖 良舜

宗 務 総 長 吉村 暲英

教 学 部 長 中江 慈光

庶 務 部 長 岡田 眞澄

財 務 部 長 北川 全宏

大阪市平野区平野上町 一七二六
〒547-0045 〇六(六七九)〇〇二六

孝道山 本仏殿

第二世統理 岡野 正貫

副統理 岡野 鄰子

第三世統理 岡野 正純

横浜市神奈川区鳥越三八
〒221-0064 〇四五(四三三)二二〇一

本門佛立宗
本山宥清寺

講 有 小山 日誠

宗 務 総 長 佐藤 日凰

本山宥清寺
〒602-8336 京都市上京区一条通七本松西入
滝ヶ鼻町一〇〇五番地の一
T E L 〇七五(四六三)四六二〇(代)
F A X 〇七五(四六三)四六五一
本門佛立宗 宗務本庁
〒602-8377 京都市上京区御前通一条上る
東堅町一〇番地
T E L 〇七五(四六一)一一六六(代)
F A X 〇七五(四六四)五五九九
URL http://www.honnon-butsumyushinor.jp/

聖観音宗 浅草寺

貫 首 清水谷 孝尚

東京都台東区浅草二丁三一
〒111-0032 〇三三八(四二〇)一八一
F A X 〇三三八(四五)六九三三

宗 教 法 人 念 法 眞 教

総 本 山 金 剛 寺

大阪市鶴見区緑三十四一三二
〒538-0054 〇六六(九一一)二二〇一
http://www.nenpoushinkyou.jp/

年 新 賀 謹

天台眞盛宗宗務所
総本山西教寺

管 長 西村 岡 紹

宗務総長
執事 長 武田 圓 寵

教学部長 三津 堯 賢

庶務部長 勝田 秀 譽

財務部長 藤上 良 英

社会部長 砂原 圓 凝

滋賀県大津市坂本五―三―一
〒520-0113 ○七七(五七八)〇〇一三
FAX ○七七(五七八)三四一八

新潟県仏教会

会 長 中村 啓 識

全仏評議員 春日 浩 三

副会長 桑原 大 宗

同 上原 教 仁

同 春日 教 雄

同 坂部 祐 仁

事務局長 小林 秀 徳

長岡市上田町二―二五 徳聖寺内
〒940-0074 ○二五八(三三)一五八六

信貴山眞言宗
総本山朝護孫子寺

管 長 田中 眞 瑞

長 老 鈴木 鳳 永

宗 務 長 鈴木 貴 晶

寺 務 長 野澤 密 孝

奈良県生駒郡平群町信貴山
〒636-0923 ○七四五(七二)二二七七
二二八〇一

眞言三寶宗
大本山清澄寺

法管 主 長 坂本 光 謙

宗 務 長 岡田 康 秀

執行長 有井 良 隨

鉄斎美術館
館 長 村越 英 明

宝塚市米谷字清シ一番地
〒665-0837 ○七九七(八六)六六四一
FAX ○七九七(八六)六六六〇
<http://www.kiyoshikoin.or.jp>

西山浄土宗
総本山光明寺

法管 主 長 岩田 文 有

内局 一 同

京都府長岡京市粟生西条ノ内二六―一
〒617-0811 ○七五(九五五)〇〇〇一一
<http://www.komyo-ji.or.jp>

顕本法華宗

管 長 中村 日 玄

宗務総長 藤崎 広 学

京都市左京区岩倉幡枝町九十一
〒606-0015 ○七五(七九)七一一七
FAX ○七五(七九)七二六七

総本山 根来寺

新義眞言宗宗務所

和歌山県岩出市根来二二八六
総本山 根来寺内
〒649-6202 ○七三六(六二)一四四四
FAX ○七三六(六二)一〇四四

臨濟宗円覚寺派

大本山 円 覚 寺

鎌倉市山ノ内四〇九
〒247-8503 ○四六七(二二)〇四七八
<http://www.engakuji.or.jp/>

大本山大覚寺
眞言宗大覚寺派宗務庁

管門 長 跡 新 開 眞 堂

京都市右京区嵯峨大沢町四
〒616-8411 ○七五(八七)〇〇七一
FAX ○七五(八八)四九一一

年 新 賀 謹

<p>大阪府仏教会 會長 増田 貞圓 (真宗大谷派 圓勝寺)</p> <p>副會長 北村 日照 (日蓮宗 櫛笥寺)</p> <p>同 森田 俊朗 (和宗 中之院)</p> <p>同 辻本 戒雲 (浄土真宗本願寺派 常照寺)</p> <p>同 村山 廣甫 (曹洞宗 東光寺)</p> <p>事務局長 井桁 雄弘 (浄土宗 大圓寺)</p> <p>事務局次長 二上 寛弘 (真言宗 釈迦院)</p> <p>事務局 大阪市住吉区墨江三十七一八 大圓寺内 〒558-0043 FAX 〇六(六六七)三二五九 FAX 〇六(六六七)五〇〇四</p>	<p>社団法人 全日本仏教婦人連盟</p> <p>名譽會長 鷹司 誓玉</p> <p>會長 大谷 貴代子</p> <p>副會長 稲山 靈芳</p> <p>同 大賀 美都子</p> <p>同 末廣 久美</p> <p>理事長 島田 喜久子</p> <p>事務局長 林 惠智子</p> <p>東京都渋谷区千駄ヶ谷 四一五一―二〇五 〒151-0051 FAX 〇三(五七七)〇六七七 FAX 〇三(五七七)〇六七七 http://jbwf.jp E-mail info@jbwf.jp</p>	<p>金峯山修験本宗 總本山金峯山寺</p> <p>管 長 五條 順教</p> <p>宗務總長 田中 利典 執行 長</p> <p>奈良県吉野郡吉野町吉野山 〒639-3115 FAX 〇四七六(三二)四五六三</p>	<p>真言宗中山寺派</p> <p>大本山中山寺</p> <p>宝塚市中山寺二丁目十一―一 〒665-8588 FAX 〇七七七(八七)〇〇二四 FAX 〇七七七(八七)九八七七 http://www.nakayamadera.or.jp</p>
<p>真言宗須磨寺派 大本山須磨寺</p> <p>貫 主 小池 弘三</p> <p>寺務長 吉井 惠貫</p> <p>神戸市須磨区須磨寺町四一六一八 〒654-0071 FAX 〇七八(七三)〇四一六</p>	<p>東寺真言宗</p> <p>宗務總長 橋本 尚信</p> <p>京都市南区九条町一 〒601-8473 FAX 〇七五(六七)三三七七 FAX 〇七五(六六)六八五六</p>	<p>滋賀県仏教会連合会</p> <p>滋賀県大津市坂本五―一三―一 滋賀県仏教会事務局 〒520-0113 FAX 〇七七(五七八)〇〇一三 FAX 〇七七(五七八)三四一八</p>	<p>北海道仏教会連盟</p> <p>會長 藤井 純惠</p> <p>札幌市中央区北三条西十九丁目二―一 浄土真宗本願寺派北海道教区教務所内 〒060-0003 〇一一(六一)九六二三</p>
<p>静岡県仏教会</p> <p>會長 伊藤 文元</p> <p>静岡県浜松市中区下池川町 二七一―一 天林寺 〒430-0905 FAX 〇五三(四七)六二二六</p>	<p>鳥取県仏教連合会</p> <p>會長 疋田 哲寿</p> <p>鳥取県米子市淀江町淀江二四五 精明寺内 〒689-3402 FAX 〇八五九(五六)二五二五</p>	<p>真言宗中山寺派</p> <p>宗務總長 橋本 尚信</p> <p>京都市南区九条町一 〒601-8473 FAX 〇七五(六七)三三七七 FAX 〇七五(六六)六八五六</p>	<p>真言宗中山寺派</p> <p>大本山中山寺</p> <p>宝塚市中山寺二丁目十一―一 〒665-8588 FAX 〇七七七(八七)〇〇二四 FAX 〇七七七(八七)九八七七 http://www.nakayamadera.or.jp</p>
<p>真言宗須磨寺派 大本山須磨寺</p> <p>貫 主 小池 弘三</p> <p>寺務長 吉井 惠貫</p> <p>神戸市須磨区須磨寺町四一六一八 〒654-0071 FAX 〇七八(七三)〇四一六</p>	<p>東寺真言宗</p> <p>宗務總長 橋本 尚信</p> <p>京都市南区九条町一 〒601-8473 FAX 〇七五(六七)三三七七 FAX 〇七五(六六)六八五六</p>	<p>滋賀県仏教会連合会</p> <p>滋賀県大津市坂本五―一三―一 滋賀県仏教会事務局 〒520-0113 FAX 〇七七(五七八)〇〇一三 FAX 〇七七(五七八)三四一八</p>	<p>真言宗中山寺派</p> <p>大本山中山寺</p> <p>宝塚市中山寺二丁目十一―一 〒665-8588 FAX 〇七七七(八七)〇〇二四 FAX 〇七七七(八七)九八七七 http://www.nakayamadera.or.jp</p>
<p>静岡県仏教会</p> <p>會長 伊藤 文元</p> <p>静岡県浜松市中区下池川町 二七一―一 天林寺 〒430-0905 FAX 〇五三(四七)六二二六</p>	<p>鳥取県仏教連合会</p> <p>會長 疋田 哲寿</p> <p>鳥取県米子市淀江町淀江二四五 精明寺内 〒689-3402 FAX 〇八五九(五六)二五二五</p>	<p>滋賀県仏教会連合会</p> <p>滋賀県大津市坂本五―一三―一 滋賀県仏教会事務局 〒520-0113 FAX 〇七七(五七八)〇〇一三 FAX 〇七七(五七八)三四一八</p>	<p>北海道仏教会連盟</p> <p>會長 藤井 純惠</p> <p>札幌市中央区北三条西十九丁目二―一 浄土真宗本願寺派北海道教区教務所内 〒060-0003 〇一一(六一)九六二三</p>

年 新 賀 謹

二〇〇七年十一月十九日・二十日、パシフィコ横浜（神奈川県横浜市）におきまして全日本仏教会財団創立五十周年記念事業「第四十回全日本仏教徒会議神奈川大会」を円成いたしました。皆様のご協力とご参加に対し、心より感謝いたします。

神奈川県仏教会

会 長 横山 敏明

副 会 長 倉田 隆常

同 長尾 徳順

同 藤井 良晃

神奈川県大会
実行委員長 本間 孝康

神奈川県大会
実行副委員長 和田 大雅

事務局 井澤 孝一

横浜市中央区大平町九十六
西有寺内
〒231-0859 ○四五(六六)〇一六六

財団法人 埼玉県佛教会

会 長 酒井 文雄

副 会 長 藤田 得三

同 萩野 映明

専務理事 木村 盛雄

常務理事 穂山 教雄

同 石垣 源順

同 金剛 秀房

同 大塚 寛爾

事務局 加藤 玄静

さいたま市浦和区高砂

四一三三一一八

〒330-0063 ○四八(八六)二二三八

FAX ○四八(八六)六六四九

http://saibutunet/

岐阜県仏教会

岐阜市西野町三一
岐阜西別院在会所西側入口
〒500-8882 ○五八(二六六)七八〇三
FAX ○五八(二六六)七八〇三
http://bukkyogifu.net/

愛媛県仏教会

会 長 斎藤 友巖

副 会 長 片井 祥雲

同 二宮 泰慶

四国中央市川之江町一七七五

宅善寺内

愛媛県佛教会事務局

〒799-0101 ○八九六(五八)三三三〇〇

東京都仏教連合会

会 長 井上 瑞雄

理 事 長 山田 一真

事務局 新倉 典生

東京都足立区梅田一―二十六―十
善立寺内
〒123-0851 ○三(三八八)一三六七
FAX ○三(三八八)八二五二

財団法人 国際仏教興隆協会

印度山日本寺
竺 主 中村 康隆

理 事 長 安田 暎胤

事務総長 正本 乗光

役 員 一 同

東京都目黒区中目黒五―二四―五三

〒153-0061 ○三(三七)一七六〇八

FAX ○三(三七)一七六七三

http://homepage2.nifty.com/nipponji/

E-mail: ihba@nifty.com

時宗宗務所

宗 務 長 高木 貞歡

神奈川県藤沢市西富一―八―一
遊行寺内
〒251-0001 ○四六六(二三)七二七六

社団法人 日本仏教保育協会

東京都港区芝公園四―七―四
照明会館内
〒105-0011 ○三(三四三)七四七五
FAX ○三(三四三)一五一九

全日本仏教青年会

事務局
奈良県吉野郡吉野町吉野山
総本山 金峯山寺内
〒639-3115 ○七四六(三三)八三七一
http://www.jyba.jp

年 新 賀 謹

臨濟宗南禪寺派

宗務総長 後藤 憲雄

京都市左京区南禪寺福地町八六
〒606-8435 〇七五(七七)〇三六五
FAX 〇七五(七七)二六九八九
http://www.nanzennet
E-mail: info@nanzennet

真言宗国分寺派

管 長 丸山 雙誉

大阪市北区国分寺一―六―一八
〒531-0064 〇六(六三五)五六三七
FAX 〇六(六三五)五六四七

愛知県仏教会

会 長 近藤 真道

副 会 長 吉田 教行

同 田畑 修身

同 岩木 涼山

名古屋市中昭和区高峯町四八
〒466-0811 〇五二(八三)九七二〇
普蔵寺内

福島県仏教会

会 長 中村 昌道

専務理事 秋月 亨観

事務局長 増子 和光

会津若松市川原町五―二〇 弘長寺

〒965-0865 〇二四二(二七)三六三七

天台寺門宗 岩手県仏教会
和宗 群馬県仏教連合会

妙見宗 栃木県仏教会
真言宗善通寺派 茨城県仏教会

真言宗山階派 千葉県仏教会
真言宗泉涌寺派 石川県仏教会

真言宗大鳴派 福井県仏教会
浄土宗西山禅林寺派 山梨県仏教会

浄土宗西山深草派 長野県仏教会
真宗高田派 京都仏教会

真宗仏光寺派 京都府仏教連合会
真宗興正派 兵庫県仏教会

真宗木辺派 和歌山県仏教会
臨濟宗建長寺派 島根県仏教会

臨濟宗相国寺派 岡山県佛教会
臨濟宗東福寺派 香川県仏教会

黄檗宗 (社)徳島県仏教会
法華宗本門流 高知県仏教会

法華宗陣門流 福岡県仏教連合会
法華宗真門流 長崎県仏教連合会

本門法華宗 宮崎県仏教連合会
法相宗 沖縄県仏教会

聖徳宗 (財)仏教伝道協会
華嚴宗 (財)日本仏教鑽仰会

真言律宗 東京ブデイストクラブ
律宗 仏教情報センター

青森県仏教会

財団創立50周年
記念事業実行委
員会 張田 珠潮
森 寛勝
松山 英照
谷 晃昭
廣橋 義敬
菅野 秀浩
渡部 高男
坂本 峰徳
福田 収治
福田 祐雄
岡田 祐雄
岡田 光壽
生柳 光壽
君野 諦賢
松浦 浩道
前阪 良憲
細川 景一
濱中 光礼
久我 儼昭
青木 謙整
岡本 誠教
朝比奈恵温
窓岡 弘道
福家 俊彦
牧野 秀成
田中 利典
木内 隆志
小峰 立丸
一島 正眞
飯島 尚之

副委員長 安原 晃
英徳
不二川公勝
石川 正生
小林 正道
小松 淨慎
服部 融宣
高木 貞歡
西村 輝成
川島 宏之
荒川 正憲
野生司祐宏
中 正宣
藤木 雅雄
杜多 徳雄
木内 隆志
小峰 立丸
一島 正眞
飯島 尚之

委員 山田 敏明
横山 敏明
加納 博司
近藤 真道
増田 真圓
坂本 観泰
松濤 弘道
前田 專學
桶屋 良祐
柴田 尚明
樹谷 淳宣
山下 昭文
中村 澄枝
齋藤 明聖
入西 勝彦

委員 張田 誠徳
森 哲寿
正田 哲夫
萩岡 裕明
藤原 宥然
三浦 章爾
一月 正人
吉田 海心
林 恵智子
藤城 尚
藤本 乘光
正本 乘光
小林 昭彦
佐藤 功岳
高島 孝範
小川 亮昌
安本 利正
西村 輝成
川島 宏之
荒川 正憲
野生司祐宏
中 正宣
藤木 雅雄
杜多 徳雄
木内 隆志
小峰 立丸
一島 正眞
飯島 尚之

委員 森 寛勝
松山 英照
谷 晃昭
廣橋 義敬
菅野 秀浩
渡部 高男
坂本 峰徳
福田 収治
福田 祐雄
岡田 祐雄
岡田 光壽
生柳 光壽
君野 諦賢
松浦 浩道
前阪 良憲
細川 景一
濱中 光礼
久我 儼昭
青木 謙整
岡本 誠教
朝比奈恵温
窓岡 弘道
福家 俊彦
牧野 秀成
田中 利典
木内 隆志
小峰 立丸
一島 正眞
飯島 尚之

委員 張田 誠徳
森 哲寿
正田 哲夫
萩岡 裕明
藤原 宥然
三浦 章爾
一月 正人
吉田 海心
林 恵智子
藤城 尚
藤本 乘光
正本 乘光
小林 昭彦
佐藤 功岳
高島 孝範
小川 亮昌
安本 利正
西村 輝成
川島 宏之
荒川 正憲
野生司祐宏
中 正宣
藤木 雅雄
杜多 徳雄
木内 隆志
小峰 立丸
一島 正眞
飯島 尚之

委員 張田 誠徳
森 哲寿
正田 哲夫
萩岡 裕明
藤原 宥然
三浦 章爾
一月 正人
吉田 海心
林 恵智子
藤城 尚
藤本 乘光
正本 乘光
小林 昭彦
佐藤 功岳
高島 孝範
小川 亮昌
安本 利正
西村 輝成
川島 宏之
荒川 正憲
野生司祐宏
中 正宣
藤木 雅雄
杜多 徳雄
木内 隆志
小峰 立丸
一島 正眞
飯島 尚之

委員 張田 誠徳
森 哲寿
正田 哲夫
萩岡 裕明
藤原 宥然
三浦 章爾
一月 正人
吉田 海心
林 恵智子
藤城 尚
藤本 乘光
正本 乘光
小林 昭彦
佐藤 功岳
高島 孝範
小川 亮昌
安本 利正
西村 輝成
川島 宏之
荒川 正憲
野生司祐宏
中 正宣
藤木 雅雄
杜多 徳雄
木内 隆志
小峰 立丸
一島 正眞
飯島 尚之

委員 張田 誠徳
森 哲寿
正田 哲夫
萩岡 裕明
藤原 宥然
三浦 章爾
一月 正人
吉田 海心
林 恵智子
藤城 尚
藤本 乘光
正本 乘光
小林 昭彦
佐藤 功岳
高島 孝範
小川 亮昌
安本 利正
西村 輝成
川島 宏之
荒川 正憲
野生司祐宏
中 正宣
藤木 雅雄
杜多 徳雄
木内 隆志
小峰 立丸
一島 正眞
飯島 尚之

第四十回 全日本仏教徒会議神奈川大会

第一日目

基調講演

十九日、午後一時四十分よりの基調講演は奈良康明氏。講題は「草の根的対話の提言」であった。

「バランスの崩れた今の社会ではしきりに『共生』が叫ばれている。だが、それだけ叫ばれるのは『共生』が実現できていないから、ということ。仏典には帝釈天が大きな網を地球にかけ、網目に宝珠が付き輝いているという比喩があるが、これは何を言いたいのか。地球上のものは他と関わってしか存在しないということ、網という全体があつて個があり、全体なくして個はない、という縁起の世界」と述べた。

また、宗教協力に関しては、「十年一日のごとく、同じ事しか話されていない。いかに仏教は平和か、という事を同じトーンで話している」と苦言を呈し、「対話は共生を目指して具体的に動き出す運動。それが今日一番求められている」と提起した。



奈良康明駒澤大学前総長の基調講演

この提言を受けて、参加者は各部屋に分かれて加盟団体代表者会議、及び第一〜第四までの分科会が開催された。各分科会の終了後、再びメインホールに参加者が集合、全体報告会として、各分科会及び加盟団体代表者会議の報告がなされた。

交流懇親会

午後六時半より交流懇親会が開催され、佐藤令宜副会長・パロップ・タイアリーWFB事務総長が挨拶、寺町研山副会長の発声により乾杯が行われ、終始和やかに懇談された。



佐藤令宜副会長



寺町研山副会長



パロップ・タイアリーWFB(世界仏教徒連盟)事務総長

ダライ・ラマ法王十四世、神奈川大会のため来日

今大会の講演のため、ダライ・ラマ法王十四世が十一月十五日に来日



ダライ・ラマ法王十四世と
大道晃仙本会会長の謁見

大会初日の十九日午後、大道晃仙会長・安原晃理事長・横山俊明大会会長・池田行信事務総長が謁見の間においてダライ・ラマ法王と謁見。法王は会長との謁見において、「日本仏教界の長老に会えた事は非常に嬉しい」と感謝を述べた。

翌二十日、特別記念講演(演題「信ずる心と平和」)に先立ち、ダライ・ラマ法王より安原理事長と横山大会会長へ記念の仏像の贈呈が行われた。



ダライ・ラマ法王十四世より
安原晃本会理事長へ仏像の贈呈

第二日目 記念式典及び法要

翌二十日、会場を国立大ホールに移動し、本間孝康大会実行委員長の開会の辞が述べられ、続いて横山敏明大会会長を導師に法要が行われた。



法要 式衆は曹洞宗関係者及び神奈川県仏教会役員

法要の後、大道晃仙本会会長による挨拶が行われた。会長はダライ・ラマ法王の講演に期待感を示し、「一人でも多くの仏教徒が世界の平和と共生について深く考える機会となり、具体的実践が展開されると確信する」と述べた。



大道晃仙本会会長による挨拶

大会宣言の後に、ダライ・ラマ法王十世の講演。



五千名の聴衆がダライ・ラマ法王の講演に耳を傾けた

講演終了後、次回大会開催地となる、栃木県仏教会に大会旗が手渡される。閉会となった。



塚田宗雄栃木県仏教会会長（写真左）へ横山大会会長より大会旗が渡された

加盟団体代表者会議

「NEXT50

―地域の縁・アジアの縁

そして世界へ―

「全一仏教運動の具現化に向けて」

【提言者】

池田行信（全日本仏教会事務総長）

【助言者】

齋藤明聖（財団創立五十周年記念事業実行委員会総務部会長）

業実行委員会総務部会長）

【提言者から】

本会寄附行為に「全日本仏教徒会議」についての言及がない。本会と全日本仏教徒会議との関係、さらに全日本仏教徒会議は仏教徒会議なのか仏教大会なのか。仏教徒会議は仏教興隆の為に、多くの人々に仏教に対する関心と理解を求め、本会への認知を得る機会とすべきである。また仏教界の今日的な課題を共有・討議し、宗教心の振興と仏教文化の宣揚に寄与する契機とすべきである。その意味においても、本会における仏教徒会議の位置づけを明確にする必要があると思われる。

【助言者から】

古くは仏教徒会議に関する規則があり、それに沿って会議を運営した経緯がある。ただ、昔の会議運営に関する規則だけでは、現在の運営に馴染まな

くなっている。今後は「対社会」を意識したものを本会事業として企画・運営することは大事なことだと思う。

【参加者からの意見】

・檀信徒や門徒とともに開催することにより社会にアピールできる。そういう意味では会議より大会の方が馴染むのではないか。

・社会的な問題を考える場として、宗派や地域や立場を超えた会議も必要。仏教者同士の議論を深め、決議を何らかの形で本会事業に反映できる「受け皿」が必要と思われる。

・規程の設置には賛成できる。決めたことを実行に移すことは「運動を起す」という意味で大切なことである。

【まとめ】

仏教徒会議なのか仏教徒大会なのか。いずれの形態にしても「僧俗一体の仏教運動」「社会にアピールする」という必要性がある。その意味では本会事業における「公益」の重要性は確認できた。各代表それぞれの地域で置かれている立場から話を伺って「会議で決めたことを本会事業に反映する為の何らかの方策は必要」ということで意見の一致が見られ、事務総局から提示した「全日本仏教徒会議規程（案）」が了承された。

第一分科会

「アジアの平和と仏教徒の役割」

（日本仏教青年の

可能性を求めて）



【提言者】

坂本観泰（全日本仏教青年会

直前理事長）

【座長】

上田紀行（東京工業大学

大学院准教授）

【パネリスト】

ギヤナ・ラタナ・テラ

（愛知学院大学講師）

クンチョック・シタル

（チベット仏教普及協力会

ポタラカレッジ副会長）

本多静芳（アユース国際協力

ネットワーク理事）

第一分科会は「アジアの平和と仏教徒の役割」日本仏教青年の可能性を求めて」をテーマに行われた。

今回の各分科会の中で、青年僧侶の組織である全日本仏教青年会にゆだねられた唯一の分科会であり、百六十名を超える参加者の期待は大なるものが感じられた。

まずシタル氏が「日本の仏教者は自信がないように見える」との発言を行った。「仏教の研究をしていながら、その仏教教理を使って衆生へ積極的に話しかけをしていない」と指摘した。次にテラ氏は、「ブッダは穏やかな心は穏やかな会話と行動をもたらすと教え、永遠に穏やかな人を聖人としたと説明。平和な世界を希求するに、世の中の全ての人々が聖人になるのをいつまでも待っているのはいかなるものか」とし、ブッダの教えの積極的な活用を説いた。本多氏は、ご自身が関わるアユース国際協力ネットワークの活動について語り、「社会の諸問題について仏教者の発言や行動が必要」と述べた。そして座長の上田氏が、平和とはこれまでのように、ただ単に語ることに始終せず、仏教者は「同事」として関わらざるを得ないのだと自覚すべきである」と締めくくった。

第二分科会

「少子高齢化社会と寺院のあり方」

【提言者】

中島隆信

（慶應義塾大学商学部教授）

【座長】

志村碧崖（神奈川県仏教会理事）

【パネリスト】

平野仁司（座間市仏教会会長）

藤原成一（日本大学芸術学部教授）

川上陽子（内閣府特命大臣）



中島隆信氏は経済学者という立場から提言。少子高齢化と従来型

家族制度の崩壊は、無縁墓の増加など寺檀関係に変化をもたらし、檀信徒の寺離れを助長させる。今後の寺院経営に必要な事は、檀信徒のニーズに答える事。それは心の救済である。現代人は仏教の教

えに救いを求めている。家単位ではなく個々の檀信徒との信頼関係を保ち、ニーズを的確に捉え、いかにそれに答えていくかが大切であり、このような努力が、結果的に寺院経営を支えていく事になると述べた。

パネリストの上川陽子氏は、親子や地域の絆を再生する場として開かれた寺院であってほしいと発言。また藤原成一氏は、現代社会は空間も時間も高密度化し、人々は大変息苦しい生活を強いられており、今求められているのは「間」すなわち「空っぽ」であると発言。寺院は世俗の尺度とは違う「空っぽ」の空間を作る努力をしてほしい、何もしないではほしいと述べた。一方、寺院住職である平野仁司氏は、人が集まる寺づくりを目指して開催している各種同好会や、またそれが出来るように設計された寺院施設を紹介。寺院は地域の文化センターとしての役割を果たすべきと発言した。

この後、パネラー達のやりとりも活発に行われ、会場は熱をおびてきたが、残念ながら時間切れ。結論は出なかったが、今後の寺院運営への示唆を与える大変有意義なシンポジウムとなった。

第三分科会

「現代社会における
仏教葬儀のあり方」
（本来の機能を失いつつある
現代の仏教葬儀）

【提言者】

佐藤功岳（横浜市仏教連合会
時局対策委員長）

【座長】

川上敬吾（横浜市仏教連合会会長）

【パネリスト】

三浦公正（前時宗
布教伝道研究所長）

小谷みどり（第一生命経済研究所
主任研究所員）

芝崎成光（全日本葬祭業協同組合
連合会常務理事）



第三分科会は「現代社会における仏教葬儀のあり方」をテーマに座長を務める川上敬吾氏の挨拶で始まった。

最初に提言者の佐藤功岳氏が「昭和五十年代から大都市では、葬儀の主導権が地域や寺院から葬祭業者へ移っていった。告別式という言い方が当たり前になり、葬儀は祈りの場、布教の場では無くなりつつある。こうした状況を打破しようと、横浜市仏では葬祭業者と協議会を開催し、『正しい仏教葬儀普及ネットワーク』を設立して運営を始めた」という提言を行った。

次に三人のパネリストの発言に移った。まず小谷みどり氏が「今は八十五パーセントの人が病院で亡くなる。そのため病人の死期を予測できることが多く、葬儀の場で悲嘆に暮れる遺族が減っている」と社会学者の立場で現況を指摘。芝崎成光氏から「全般的に、葬儀の会葬者が減っている。通夜の時は、読経の前に法話をすると効果的ではないか」という提案がおこなわれた。最後に三浦公正氏が「大都市では、五割の人が菩提寺を持たない。しかも家族制度の崩壊で仏教習俗に触れる機会も失いつつある」と危機感を表明した。会場からは「葬儀の経費はもっと安くできないか」等、様々な質問が寄せられて、活発な討議が展開した。

第四分科会

「生命倫理と
仏教徒に問われること」

「人の一生が始まる瞬間と
死ぬ瞬間はどの時点だろうか」

【提言者】

田中雅博（大正大学講師 西明寺住職）

【座長】

三宅守常（日本大学医学部准教授）

【パネリスト】

柴田寛彦（医学博士 本澄寺住職）

佐藤雅彦（大正大学講師 浄心寺住職）

中野東禅（武蔵野大学講師）

まず、僧侶であり医師である田中氏は、「生殖補助医療」、「ヒト胚利用再生医療」、「安楽死と苦痛延命」、「死の決定」について「お釈迦様は、生老病死を説かれたが、それらを思い通りにしたいという思いから科学技術が発達し、新たな「苦」が出現した」と提言。

次に三人のパネリストの発言に移った。柴田氏は、「身体を持つた人間としての一生をいかに生きるべきかが、仏教に問われている」と指摘。佐藤氏は、「救いの対象となる人々の生き方を尊重することが、仏教者として議論より大切であると」述べた。中野氏からは、「生命問題は価値多元化が



宗教に衝突し、その解決として自己決定主義に逃げている。自己の命という欲求と神仏の命との矛盾を調和させるのは「生き方学」である。自然としての命（死すべきもの）と「医療的努力（自主性・科学）」との境界を考察する理論を仏教では「命根（寿煖識）」等に行うことが出来る。神の命という価値一元化の思考法では答えられない。一元的価値を基本として「どう生きるか」という多元性にかかわるのが仏教であろう。」と問題解決に向けた考えを提示。

その後、会場との質疑応答の時間が持たれ、「いのち」を何よりも大切にする仏教思想に基づき、生命倫理問題にさらに取り組む必要性が語られ、具体的にはビハール活動等も紹介された。

天台眞盛宗管長・第四十三世総本山西教寺貫首 大僧正西村岡紹猥下晋山式並びに祝賀会

十一月十七日(日)、天台眞盛宗管長・第四十三世総本山西教寺貫首大僧正西村岡紹猥下の晋山式が、執り行われた。当日は、半田

孝淳天台座主、福家俊明天台寺門宗本山園成寺長史はじめ、宗門内外の僧侶、檀信徒、政財界より七百五十名が参列し、西村猥下の晋山を喜んだ。



表白で晋山奉告をする
西村岡紹猥下

午前十時三十分より、総本山西教寺本堂にて西村猥下を導師に奉告法要が厳修された。

西村猥下は龍谷大学、仏教大

学、叡山学院で教壇にたち、また、天台眞盛宗のテレフォン法話を通じて、常に解り易く仏法をお説きになっている。

法要後、午後一時より、大津プリンスホテルに会場を移し祝賀会が開催された。開演後、半田孝淳天台座主、福家俊明天台寺門宗本山園成寺長史よりの祝辞に続いて鏡開きが行われ、参加者は宗派の垣根を超えた仏教興隆への願いの中、終止和やかに懇親を深めていた。



盛大に鏡開きが行われた
左から二番目が西村猥下

第五十三回長野県仏教徒 浅間大会開催

十一月二十日午後一時より、長野県佐久勤労福祉センターを会場に、第五十三回長野県仏教徒浅間大会が開催された。

第一部は長野県仏教会会長・善光寺大勧進貫主、小松玄澄大僧正の大導師、各宗派御住職出仕の下に厳粛に記念法要が営まれた。

第二部の式典では、小松会長および今大会の実行委員長である北佐久仏教会会長の川嶋光雄師がそれぞれ挨拶を行った。

続いて、仏教会活動に長年貢献された、県内の御寺院住職に小松会長から感謝状が贈呈された。

来賓挨拶では本会大道晃仙会長の祝辞を壽山良光国際部長が代読した。

第三部では、作家の立松和平氏が「命を考える」をテーマに約一時間半に亘り講演を行い、多くの参加者は熱心に耳を傾けていた。

会長・副会長推戴委員会開催

十一月四日(火)午後一時三十分より、東京プリンスホテルにおいて、本会第二十八期(平成二十年四月～二十二年三月)の会長・副会長推戴委員会が開催された。

三帰依文唱和の後、安原晃理事長の挨拶に続き、正副委員長の選出が行われ、委員長に小林正道師、副委員長に沖田定信師を選出。小林委員長進行のもと、会長・副会長推戴候補について慎重に審議された。会議の結果、会長候補者、副会長候補者について満場一致で推戴することとなった。

常務理事会開催

十二月四日(火)午後二時三十分より東京プリンスホテルにおいて常務理事会が開催され、「第二十八期会長・副会長の推戴について」「平成二十年度事業大綱について」「平成二十年度予算大綱について」「(仮称)宗教教育推進委員会の設置並びに規定について」

「公益法人制度改革に対する本会の対応について」の五項目について慎重に協議された。

なお、公益法人制度改革に関して、本会は公益財団法人への移行を目指す方針が全会一致で確認された。

哀悼

丸山秀彦師（元評議員）

十月一日遷化 七十三歳

真言宗国分寺派 前宗務総長

★今月の表紙について★

インド国内はもちろん、世界から観光客が訪れるタージマハール。言うまでもなくインドムガル朝のシャージャハーン帝のムムターズマハールの廟である。一六三〇年から二十二年かけて造られたという。妃への思いの丈がうかがえる。

財団創立五十周年記念事業 特別協賛金寄付者御芳名

〔寄付者〕

(十一月三日～十二月十二日)

大本山 永平寺

東京ブデイストクラブ

(順不同・敬称略)

ご支援ありがとうございます。

事務総局録事

十一月（十一～三十日）

十一日 ▼ 民主党衆議院議員末松義規氏パーティー参加

十三日 ▼ フィルムクレッセント菅氏来局

十四日 ▼ 仏教英語プログラム

▼ 防災寺子屋 ワークショップ参加

十五日 ▼ 妙智会訪問

▼ 民主党候補者樽床伸二氏を励ます会参加

十六日 ▼ 事務連絡会議

十八日 ▼ 天台眞盛宗晋山式参列

十九日 ▼ 第四十回全日本仏教徒会議 神奈川大会(至二〇日)

二十日 ▼ 長野県仏教徒大会参加

二十一日 ▼ 無料法律相談室

二十二日 ▼ 臨済宗建長寺派取材

▼ 第十六回暴力団追放都民大会参加

二十六日 ▼ 日本宗教連盟 幹事会

▼ 第三十回埼玉県佛教徒大会出席

▼ 事務連絡会議
二十八日 ▼ 局内会議

▼ 仏教英語プログラム

十二月（一～十日）

三日 ▼ (社)日本糖尿病協会訪問

▼ 上川陽子内閣府特命担当大臣モーニングセミナー参加

四日 ▼ 会長・副会長推戴委員会

▼ 常務理事会

▼ 局内会議

五日 ▼ 比叡山宗教サミット合同会議出席

▼ 日蓮宗総合財団「公益法人制度改革に対する懇談会」出席

六日 ▼ BNN企画委員会参加

七日 ▼ 京都府仏教連合会二十周年記念式典出席

▼ 勸募部会

八日 ▼ 東京都仏教連合会成道会参列

十日 ▼ インド日本国際交流年開幕イベント参加

バン格拉ディッシュサイクロン被災者救援に際し、更なる「救援基金」へのご協力をお願いします

本会では、国内外における災害救援や人道的支援に対し、緊急且つ迅速な対応をすべく「救援基金」を常時開設しております。

バン格拉ディッシュで十一月半ばに起こった水害被害で三千人を超える人々が犠牲になり、多くの被害をもたらしています。

本会は救援基金より仏教NGO ネットワークへ百万円を寄託いたします。さらなる支援の為、加盟団体・各御寺院・仏教徒の皆様、そして、宗派・宗教を超えて、皆様の暖かい浄財を左記口座までお寄せ頂きますようお願いいたします。

記

郵便振替口座 口座番号 00110-9-704834

口座名義

全日本仏教会 救援基金

お問い合わせ先

財団法人 全日本仏教会

電話 03-3437-9275

尚、第四十回全日本仏教徒会議 神奈川大会に設置させて頂きました募金箱での協力依頼におきまして、三十五万四千八百六十六円の浄財をお寄せ頂きました。

ご支援ご協力ありがとうございました。



監督 富永憲治
原作 稲葉真弓「いじめの時間」
(朝日新聞社・新潮文庫)より

CAST

林 隴 上原裕也 大河
平尾勇気 岩井七世 尾高杏奈
益岡徹 馬淵晴子 賀来千香子

全日本仏教会 後援

いじめにあっていた現実から逃れるためではなく生きるために、かかしの旅が始まった。

一人の中学生が家出した。彼は幼い頃、家のベランダから落ちて右足を悪くしたため、足を引きずるように歩き、まっすぐ立つことができない。「かかしのように傾いてるんじゃないか」同級生は彼のことを「かかし」と呼んだ。彼は小学校の時、学校に行くとき声が出ない病気に悩んでいた。「しゃべれないくせに学校に来るな」同級生のいじめに彼は無抵抗だった。中学生になって金井、望月、松岡、山田らのグループに執拗にいじめられる彼。「ぼくがいじめられるのはいいんです。いじめられる理由がわかるから…だけどヤスオは違う」同級生のヤスオが自殺した事で、彼の中で何かが変わった。中学2年生の1学期、かかしと呼ばれた少年・卓朗は、学校と家から飛び出した。泊まる場所も食べ物もない、行先のない家出だったが、そんな彼を救ったのは、同じように学校と家を捨てたイタヤ、ラー、マックだった。仲間たちとの共同生活で、平安な日々を過ごしていた卓朗だったが、中学校の山下先生が、自分を探していることを知る。「驚いた。家出してもう2週間。誰も僕のことなんか探していないと思っていたのに。心配していないと思っていたのに…」卓朗は、ノートに先生への手紙を書き始める。

かかしはなぜ、家出をしなければならなかったのか…。

■自主上映会に取り組んでみませんか！

「観てみたい・観てよかった」から「観ていただく」ための上映会のお手伝いをいたします。

映画「かかしの旅」上映会・仕様

上映時間 1時間33分／画面サイズ ビスタビジョン
プリント 35mm (ドルビーステレオ) 16mm

■お問合せ先

株式会社フィルム・クレセント「かかしの旅」
TEL: 03-3400-8801 FAX: 03-3406-7928 film.cst@themis.ocn.ne.jp

詳細「かかしの旅」公式ホームページ <http://www.film-crescent.com/kakashi/>

児童福祉文化賞受賞／文部科学省特別選定／厚生労働省社会保障審議会推薦